



Title	スタディ・クエスチョンで読む古典：『現実の社会的構成』（バーガー&ルックマン）を読む（その1）
Author(s)	長島, 美織
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 33, 85-95
Issue Date	2021-10-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83310
Type	bulletin (article)
File Information	07_nagashima.pdf



[Instructions for use](#)

スタディ・クエスチョン で読む古典

『現実の社会的構成』

(バーガー&ルックマン)を読む(その1)

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 教授

長島 美織

Reading Classics through Study Questions:
“The Social Construction of Reality: A Treatise
in the Sociology of Knowledge” by Peter L.
Berger and Thomas Luckmann (Part1)

NAGASHIMA Miori

abstract

This is the first part of a series of an attempt to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed ‘Study Question Method’ helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is “The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge”, by Peter L. Berger and Thomas Luckmann. This part 1 examines the Preface and Introduction, which deals with the relation to the previous developments in the field of sociology of knowledge. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.

1 読解題材としている書籍とスタディ・クエスチョン・メソッドについて¹

今回から取り上げる古典は、Peter L. BergerとThomas Luckmannによる『The Social Construction of Reality——A Treatise in the Sociology of Knowledge』という書物で、1966年にアメリカで出版されました。その後、1977年に山口節郎訳で、新曜社から『日常世界の構成』として、そして、2003年に『現実の社会的構成—知識社会学論考』と題目を変更して、出版されています。ここでは、2007年の新版第3刷を使用しています。2003年からの改題で、より英語の原題に近いものとなったわけですが、副題のtreatiseというのは、学術論文という意味ですので、これは下で取り上げる序言のなかでも解説されているとおり、新しいパラダイムを提出しているという矜持と読むこともできるでしょう。この本で提出されているパラダイムは、大きく社会構築主義(あるいは社会構成主義)として、その後の学問の進展に大きな影響を与えました。社会学のみならず、心理学、ジェンダースタディ、教育学、看護学など、多くの分野で現在は極めて常識的な考え方として浸透しています。もちろん、その立場の起源をどんどん遡っていくことは可能ですが、ほどよく近い水源のひとつに戻り、それをしっかり読んでみるのは楽しいことです。ということで、この名著を取り上げました。

読みの方法は、スタディ・クエスチョン・メソッド(Study Question Method)です。スタディ・クエスチョンという形で提示された質問に答える形で、要点をつかみつつ、学んでいく方法です。これにより、難解な学術書の森で迷ってしまうことなく、また、自分勝手な読みに逸脱してしまうこともなく、古典を読み進めて行けるようになることを目指しています。それでは、今回は、序言と序論を読んでいきましょう。以下、引用は、ことわりのないかぎり、この対象書籍からのものとなります。また、以下で対象書籍の著者たち、つまり、Peter L. BergerとThomas Luckmannを指すのに、B&Lという表記を用います。

2 「序言」の読解

まずは、「序言」から丁寧に読んで行ってみましょう。英語の原書では、Prefaceにあたる部分です。

SQ 「本書は、知識社会学の体系的・理論的論文として書かれたものである」という文章で始まっていますが、これは何を意味するのでしょうか。

「本書は、知識社会学の体系的・理論的論文として書かれたものである」と書いた後に、否定の命題が4つ重ねられています。こちらを読めば、この

▶1 本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドのよりくわしい説明は、以下の研究ノートを参照して下さい。

長島美織, 2017, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか——理論と実践の問題」(マンハイム)を読む——(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70, 「保険とリスク」(フランス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1: 第1段落から第4段落: insuranceについて』『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24: 109-124。

最初の文章が何を意味するのか少しははっきりするでしょう。4つの否定命題は、以下のとおりです。

- 1 知識社会学の発展に関する歴史的概説ではない
- 2 社会学の代表的な人物についての解説ではない
- 3 これまでの学説間の統合がいかになされるべきかについての論述ではない
- 4 論争的意図がない（他の理論的立場に対する批判をすることを意図していない）

知識社会学というのは、歴史的にこのように発達してきたのですよ…というイントロ本でもなく、また、知識社会学に貢献した人物について、それぞれが提唱した理論やその背景について解説するものでもない、ということが1番と2番の否定命題でわかります。この本は、何らかの参考書的、知識社会学入門といった本ではないのです。そしてさらに、一步進んで、過去に提唱された様々な学説がどのように継続／対立しており、どのように重なりあっており、そしてそれらを統合するにはどうすればよいかといったことを分析しているわけでもない、と言っているわけです。つまり、1-3番の否定命題をあわせると、この本で展開されていることは、既存の知識社会学の理論枠に収まるものではないということが示唆されていることとなります。そして最後に4番目の否定命題で既存の学説を批判することを意図していない、と言っているということは、つまりは既存の理論をそのままの形では採用しておらず、それをかなりの部分作りかえて、新しいものを作っているのだということを言っているのです。つまり、この本は、知識社会学の領域において、かなり革新的な新しいフレームワークを提案しているのだ、ということになります。ちなみに、序論の最後の部分（24ページ）で、知識社会学の潮流をレビューした後に、彼らはこの点に立ち戻って、再び、ここで述べていることと同様のことを述べています。そして、この序論冒頭の記述と類似性のあるパーソンズの言葉を引用しています。そして、実際、我々の目的は〈系統だった理論的説明〉に専心することにある。（25）と宣言しています。このことから見ても、本書の性質を規定するこの部分は非常に重要だということができます。

このように、この本は、新しいパラダイムを提供しているのだということを彼らは控えめな言葉でたびたび述べているわけです。どう新しいかについてはこの本の読解を通じて発見することとして、次にこの本の構成を見ておきましょう。

SQ この本の構成はどのようになっていますか。

それは、序言の部分を続けて読んでいくことと、目次をみることで理解できます。簡単に表にまとめると以下ようになります。

I部	日常生活における知識の基礎	・日常生活の現実性に関する哲学的プロレゴメナ（序説） ・本書全体で使われる基本概念の定義
II部	客観的現実としての社会	知識社会学の問題に関する著者たちの基本的理解 日常生活の現実性の経験的な発生経路
III部	主観的現実としての社会	II部で述べた理解を主観的意識のレベルに応用し、社会心理学の諸問題に理論的橋渡しを行う。

とても簡潔な構造です。彼らが今から知識社会学の新しい領域として設定しようとしている「日常生活の現実性」という探究課題について、具体的な事例を豊富に取り上げながら語っていくのがI部です。日常生活において私たちがどのようなことを自明視しているかということを中心に、日常生活の現実について、どのようなことをどのような視点から浮き上がらせたいのかという点について、第II部とIII部についての舞台設定をする重要な部分です。ここを丁寧に読むことで、彼らの問題意識とそれに対するアプローチの方法を把握することができます。

次に、社会が客観的なものとして成立しているように感じられるその現実性の経験的な発生経路はどこにあるのか、なぜ社会は私たちとは独立してそこに存在しているように感じられるのか、その根拠や土台はどこにあるのか、について探求していこうというのが、第II部です。そして最後に第III部として、私たちの日常生活にある社会というものが、どのように主観的なものとして私たちの日常で意識されているのか、について論じていくこととなります。したがって、この3部構成は、「日常生活の現実」という探究対象を、学問以前の気づきと観察、制度や文化に着目した客観的な側面、そしてその中に生きる人間の意識というレンズを通して見るという構成になっています。これら3つの側面から同じものをみることを通して、それらの循環する関係性について解きほぐしていこうというわけです。

ということで、まずは、第I部から早速読みはじめてよいのですが、その前にこの本でうちだそうとしている新しい枠組みと新しい対象領域について、それが今までの知識社会学とどのように関連しているか、そしてどのように彼らが自分たちの研究をその文脈のなかに位置付けているか、そしてそれをどう踏み越えようとしているのかが、序論で述べられているので、そこを読んでいきましょう。

3 「序論—知識社会学の問題」の読解

英語原著では、Introductionにあたる部分ですが、ここが結構難しいです。というのは、既存の知識社会学の彼らによる批判と評価が詰まっているからです。ビッグネームがひしめいていますので、あまり、ひっかからずに、サラッと読んでいきましょう。この部分は、この本を全て読み終わった後に、もう一度戻ってきて読むとよい部分です。

結構長いので、3つの部分にわけました。

1. この本で展開しようとしている「知識社会学」について (pp.1-5)
2. 従来の「知識社会学」とは?—なぜ、それから離脱することが必要だったか? (pp.5-19)
3. 従来の知識社会学からどのように離脱するか? (pp.19-26)

最初に彼らがこの本で作り出そうとしている「知識社会学」について述べ

た後、それではなぜ、従来の知識社会学がこの点で物足らなく、その路線から離脱することが必要なのかということについて述べます。この部分は、基本的に今までの知識社会学のレビューのようになっていきますので、理解するのが大変難しい部分です。そして、彼らが望んでいることを行うためには、既存の知識社会学のパラダイムから抜けなければならないということを確認した上で、それでは、どのように新しい領域を切り開くのかというのが、最後の部分です。彼らは何をどのような方法論で分析しようとしているのかについて述べ、彼らの新しいパラダイムを押し出すところです。それでは、ひとつひとつみていきましょう。

1. この本で展開しようとしている「知識社会学」について

SQ この本の基本的主張はどのようなものでしょうか。またそれに伴ってキーワードとなっている言葉はどのようなものでしょうか。2つあげ、彼らの分析の中での意味合いを説明して下さい。

基本的主張	現実社会的に構成されており、知識社会学はこの構成が行われる過程を分析しなければならない	
キーワード	現実	我々の意志から独立した一つの存在をもつと認められる現象に属する一つの特性
	知識	現象が現実的なものであり、それらが特殊な性格をそなえたものであるということの確認

これらの表現を本文から見つけるのは、むずかしくはないでしょう。しかし、それらを十分に理解するためには、少し読み進める必要があります。

SQ これらのキーワードの意味するところは、しかし人（立場）によって異なると彼らは述べています。どのように異なるか、普通の人々、哲学者、そして社会学者についてまとめましょう。

普通の人々	行き詰まりに直面しないかぎり、自分にとって何が（現実的）で、自分が何を（知っているか）とは、考えない。
社会学者	二つの現実、二つの知識の相違は、二つの社会の間の相違との関係において理解できるのではないかと考える：社会的相対性
哲学者	現実、知識の究極的な資格は何であるかを明らかにしようとする。

この説明で、少し具体的に理解できるようになってきたと思います。現実および知識というふたつのキーワードの社会的理解は、普通の人々のそれと哲学者のそれとの中間あたりに位置付けられる、と述べられています。社会学者の理解の根底にあるのは、「複数の社会」です。つまり、普通の人々は、自分が生きている現実とは異なる社会を通常想定することはありません。従って、自分の当たり前の知識、つまり常識と言われるものを疑ってみることもまれなのです。一方、哲学者もまた別の意味合いで、単一のものを求めます。哲学者は、実際の不完全な状況を脱して、究極のコアな意味合いや資格を探究しようとするので、これも抽象度を高めることによって、唯一の

ものにたどりつくことを想定しており、複数性や相対性は排除されているわけです。その中で、社会学者の特徴的なところは、複数の状況を想定し、その間の相違に焦点をあてることのできる場所だといえます。そしてそれこそが社会学者の領域、持ち分であると彼らは主張しているのです。

SQ より具体的に、社会学者が問うことができ、また問わねばならない問題について、本文の記述をもとに具体的に説明しなさい。

ここでもやはり、普通の人間と哲学者と対比しながら、論が進められています。普通の人間は、自由や責任といったものを文脈のなかでゆるやかに使います。しかし、哲学者は、自由や責任といったことばの存在論的／認識論的基盤を問うことになります。つまり、哲学者たちは、以下のような問いを立てます。

- ・人間は自由なのか
 - ・責任とはなんなのか
 - ・責任の限界はどこに存在するのか
 - ・これらの事柄を人はいかにして知りうるのか
- 一方、社会学者は、このように問うだろうとB&Lは言います。
- ・いかにして自由や責任という概念が他の社会においてではなく、ある一つの社会で自明視されるようになったのか、
 - ・いかにしてその〈現実〉がある社会において維持されているのか、
 - ・いかにしてこの〈現実〉が個人あるいは集団全体に再び失われるということがありうるのか

哲学者の問いとこれらを比較すると、大切なことが見えてきます。社会学者の問いにおいては、社会が異なれば、自由といった概念も異なるということが前提とされています。社会的相対性です。これが、それぞれの社会における現実および知識に関する社会学的探究を可能にするとともに、それらの比較を通しての知見獲得にも役立つのです。

SQ 彼らがここで新しい装いをもって設定しようとしている「知識社会学の研究対象」について、彼らは何度も言い換えを行なっています。それらについて簡潔にまとめなさい。

知識社会学の研究対象	具体的に言うと	定式化すると	さらに定式化すると	究極的には
	そこでは何が〈知識〉として自明視されているか、という観点から様々な社会の間の相違を観察すること	人間社会における〈知識〉の経験的な多様性	知識がどのようにして自明視される現実として凝結していくのか	知識社会学は現実の社会的構成の分析を問題にする

彼らの言い換えは、最終的に本のタイトルに凝縮されていきますが、ここで彼らが提出している知識社会学の対象領域の設定は、従来の知識社会学の設定を超えるものであることに注目しましょう。それゆえに、彼らは、次に、従来の知識社会学を踏まえつつ、なぜ、その領域から「外れることを必要と感じに至ったか」について説明することになるのです。

2. 従来の「知識社会学」とは？

—なぜ、それから離脱することが必要だったか？

さて、5ページの中頃から、この2番目のトピックに入っていきます。つまり、これまでの知識社会学の主な流れを概観しつつ、どうしてその延長線上にこの論考を据えることができなかつたのか、という点を論じていくこととなります。

SQ 知識社会学とは何かということについての、「最大公約数的見解」、つまり、全ての立場に受け容れられている定義はどのようなものでしょうか。

まず、知識社会学ということばは、1920年代ドイツ、哲学者マックス・シェーラーによって作り出されたということが述べられています。具体的には、彼の1925年の論文「知識社会学の諸問題」で、知識社会学の最初の定式化がなされました。最初というのは、何においても大切ですが、B&Lは、このシェーラーの定式化に影響した点として、1920年代、ドイツ、哲学者という3点が重要だとしています。（これ自体、実に知識社会学的な指摘ですが。）つまり、ドイツで当時隆盛だったのが、歴史学であるということ、そして、哲学者シェーラーが哲学者としての問題設定を行なったからという意味です。哲学的な視点で歴史学の影響を色濃く受けることによって、知識社会学とは、思想史に対する一種の社会学的解釈と規定されました。そしてこの性格づけがこれまで、知識社会学を境界的な領域にしてきたとB&Lは考えているのです。その後、この初期設定をもとに、知識社会学の守備範囲に関して、さまざまな議論が繰り広げられることとなりますが、知識社会学とは何かということについての、最大公約数的見解、つまり、全ての立場で受け容れられている定義は以下のとおり必然的に広いものとなります。

「知識社会学は人間のものの考え方とそれが展開される社会的文脈との間の関係を問題にする」(6)

言い換えると、これはさらに一般的な問題つまり、「考え方そのものの存在拘束性」という問題となるわけです。

つまり、人間の考え方を決定するものとして、歴史的要因、生物学的要因、社会的要因などいろいろな要因が考えられなかで、それぞれの決定要因と思考がどの程度、どのように関わっているものなのか、ということが、思考の存在拘束性の問題です。そして、これらの要因のなかで、特に社会学的要因に焦点を当て、思考との関係を探るものが知識社会学であると理解できるのです。

知識社会学として一貫してきたこと	人間のものの考え方とそれが展開される社会的文脈との間の関係を問題にする（それらの間にはどの程度の関連があるのか）	考え方そのものの存在拘束性という問題の社会学的中点。
------------------	--	----------------------------

さて、このように、知識社会学の始点と最大公約数的な見解を確認したあ

と、B&Lは、1920年代のシェーラによる定式化に影響を与えた3つの思想について、さらに遡って述べていくこととなります。

SQ シェーラー以前の、知識社会学の直接的な先駆者とはどのようなものでしょうか。（7）

知識社会学の直接的な先駆者	19世紀ドイツ思想界の3つの発展	マルクス主義	人間の意識は彼の社会的存在によって決定される
		ニーチェ	虚偽意識論・不信の術
		歴史主義	人間の思考の不可避な歴史性 歴史主義的概念：〈立場による拘束〉〈生活における位置〉

マルクス、ニーチェ、そして歴史主義です。まず、マルクス主義からは、中心的な問題設定と基本的概念を継承しているとしています。その中心的な問題設定は、「人間の意識は彼の社会的存在によって決定される」という命題です。これは、先ほどの知識社会学とは何かについての最大公約数的な見解からも明らかなように、すべての知識社会的問いの基礎になっています。加えて、イデオロギーと虚偽意識という基本的概念も、マルクスから継承しています。

次は、知識社会学に対するニーチェの思想の影響です。ニーチェも虚偽意識論を展開していますが、それは、欺瞞と自己欺瞞の社会的意味、そして生きていくための必要条件としての幻想について分析するなかで、形成されたもので、ルサンチマンという概念はシェーラに直接継承されたと述べられています。

最後に、19世紀ドイツの知的成果のひとつである歴史主義（歴史学）からは、知識社会学は、歴史への関心と歴史学的方法論を学んだとされています。歴史主義における支配的テーマは、「人間界のできごとに関するいっさいの視座の相対性、つまり人間の思考の不可避な歴史性」ですので、歴史主義は、思想とその歴史的状況との間の具体的な関係を考察しようとしたのです。「立場による拘束」や「生活における位置」、そして「思考の社会的位置づけ」といった歴史主義的概念は、知識社会学の中心テーゼである「思考の存在拘束性」とスムーズに連結されうるものです。ただし、この歴史主義からの影響は、6ページあたりで述べられていたように、その後の知識社会学の発展を限定的にしたというのが彼らの診断です。

SQ 知識社会学の直接的な先駆者をみた後に10ページの最後の段落で再びシェーラーに戻ってくるが、ここで述べられていることはどのようなことでしょうか。

さて、まず文章の構造を確認しておきましょう。5ページの最後の段落で知識社会学の創始者としてのシェーラーを紹介し、その後、これに影響を与えた3つの思想的立場（マルクス主義、ニーチェの思想、そして歴史主義）をおさらいしたあと、再び、10ページ最後の段落でシェーラーに戻ってきています。2度目のシェーラーではより深く彼の考え方について触れているのですが、この際、序言の冒頭で哲学者と社会学者のアプローチの仕方の違いにつ

いて触れたことが生きてきています。

それは、シェーラーはあくまで哲学者であり、彼にとっての知識社会学は、彼が目指していた究極の哲学的人間学のための一つ的手段であったということなのです。これをB&Lは、「哲学の侍女」ということばで表しています。知識社会学は、「哲学の侍女」として当初位置づけられていたのです。

シェーラーの、観念的要因と実在的要因との関係の捉え方は、ゆるやかなものです。つまり、

〈実在的要因〉は、ある一定の〈観念的要因〉が歴史にあらわれうる諸条件を調整するだけであって、後者の内容を規定するのではない

というのがシェーラーの立場です。そして、シェーラーは、社会において、人間の知識というものは、個人の経験に対してア・プリオリに存在し、その個人の経験に意味の秩序を与えるものである、と主張しました。つまり、歴史的にみれば、この意味の秩序は、特定の時間と場所（社会）に特有なものに過ぎないが、その個人にとっては、世界を眺めるときの自然に身につけられた、自然な方法として感じられるのだ、ということです。つまり、これは普通の人にとっての唯一当たり前の世界となるのです。そしてシェーラーはこれを「相対的に自然的な世界観」（11）と名づけました。シェーラーによって、このように構築された知識社会学は、マンハイムの定式化を経て、英語圏に浸透していくようになります。

次に、マンハイムの貢献について、概観しておきましょう。マンハイムにおいては、「…社会は、数学や、少なくとも自然諸科学の一部をのぞいて、人間の観念作用の出現を規定するのみならず、その内容をも規定する」ものと考えられています。先程のシェーラーの定式化と比較すると、より強い命題となっていることがわかります。そして、マンハイムはさらにイデオロギー概念の研究において、マルクスの提出した元来のイデオロギー概念を政治的文脈から切り離し、認識論的に中立なものとして、社会学的に有用な概念として再構築します。彼の普遍的イデオロギー概念によると、人間の思想は、その社会的文脈のもつイデオロギー化作用を免れることはできないのです。従って、知識が、社会や歴史的が変わるのに対応して変化する（相対主義）のは、知識は常にある一定の立場から得られた知識であるはず（相関主義）であるから、となります。このマンハイムの指摘を、B&Lは、「社会—歴史的相対性への思想の屈服ではなく、単に知識の一面的視点に対する醒めた認識」と評しています。B&Lのまとめを引用しておきましょう。

「いずれにせよ、マンハイムが考えていたのは、イデオロギー化作用を完全に一掃することはできないにせよ、社会的に基礎づけられたさまざまな立場をできるだけ多く体系的に分析することによってそれを緩和することはできる、ということであった。ことばをかえれば、思考の対象は、それについてのさまざまに異なった見方がこうして蓄積されてゆけばますます明瞭になっていく、という考えである。」（14）

これらのシェーラーとマンハイムの立場は、知識と社会の関係に対する穏

健全な捉え方と求心的な捉え方と呼ばれており、知識社会学のその後の発展を規定する重要な準拠枠となっています。つまりは、その後の知識社会学の論考は、「これらふたつの見解に対する批判および修正から成り立っている」と彼らは総括しているのです。

これに続いて、マートン、パーソンズの貢献について簡単に触れているので、ここでも簡単にまとめておきましょう。ポイントは、この評価は、あくまでもB&Lが自分たちの新しい試みを知識社会学という領域の発展のなかに位置付けるために行われているレビューであるという点です。

マートンに関しては、知識社会学と構造・機能主義理論の統合をはかり、顕在的機能と潜在的機能というふたつの対立する概念で観念作用の意図された結果と意図されていなかった副次的結果を区別したことが取り上げられています。

また、パーソンズは、マンハイムに依拠して観念のもつ役割を丹念に分析してはいるものの、B&Lは、マートンもパーソンズも、マンハイムの知識社会学を決定的には乗り越えていないと主張しています²。

SQ ここまでなされてきた概観の総括をしている文章が17ページにあります。それが、それはどういうことでしょうか。

既存の知識社会学に対するB&Lの総括は、「知識社会学の関心は理論的レベルにおいては認識論的問題に、経験的レベルにおいては精神史の問題に向けられてきた」(17) というものです。

そして、これらの総括からみえてくる問題点を指摘しています。それは、「知識社会学に社会学的知識の妥当性に関する認識論的問題」が含まれているということです。つまり、ある社会学的分析をする時に、学者が用いるカテゴリーは必然的に歴史的に相対的な思考形式によって規定されており、そしてまたその学者の遺伝的特質や心の奥底に潜む心理的な要素に規定されており、さらにその学者の属する階級に規定されているとすると、この社会学的分析の結果にどこまで確信がもてるのかと問うことです。知識社会学は、この問題に一貫して関わってきたのですが、しかし、B&Lは、このような問題は、社会学に属するのではなく、社会科学の「方法論」に属するもの、つまり哲学に属する領域なのだと言及します。知識社会学は、知識社会学自身の本来の準拠枠組内ではこれらの問題を解くことはできない、というのがB&Lの主張なのです。そして、B&Lは、この序論の最後の部分、つまり彼らの新しい構築について述べていくことになります。

▶2 このあとになされているガイガーとスタークに関するレビューについては、省略します。

3. 従来の知識社会学からどのように離脱するか？

SQ それでは、著者たちは、自分たちの知識社会学をどのようなものとして構築しようとしているのでしょうか。まずは、何を排除するのでしょうか。

B&Lは、「社会学的分析の妥当性に関する認識論的そして方法論的な問題については、問わない」と宣言しています。彼らは、それを社会学の問題としては捉えていないのです。むしろ、B&Lが目指しているのは、社会学とい

う経験的学問の基礎についての哲学的論考ではなく、社会学理論についての論考であるということです。これが、副題と繋がります。

SQ それでは、B&Lは、自分たちの知識社会学を具体的にどのようなものとして構築しようとしているのでしょうか。

これが経験的レベルにおける知識社会学の課題と関連してきます。「知識社会学の一つの分野として、観念の歴史という意味での精神史が位置づけられることは間違いないが、この観念の問題は知識社会学のより大きな問題のうちの一部を構成するにすぎず、中心的な部分でもない」(20)という彼らの総括が、重要です。つまり、今までの知識社会学は、精神史、つまり、知識人による知的活動の産物にしか焦点を当てていなかったではないか、というのが彼らの痛烈な批判です。「知識社会学は社会において〈知識〉として通用するすべてのものをとり上げなければならない」のです。言い換えれば、理論的思考ではなく、人々が日常で現実として知っていることを取り上げないといけないのではないかとということです。観念より常識的な知識を問題にしようというわけです。この日常生活という領域を知識社会学に加えることに関して、彼らはシュッツの考えから影響を受けていることを述べています。

SQ 最後にB&Lは、彼らの新しい試みをデュルケームとウェーバーという社会学の2つの大きな潮流の融合として表現しています。それはどのようなものですか。

デュルケームとウェーバーのそれぞれの見解は、以下のようなものです。25ページから引用しておきましょう。

- ・デュルケーム：第一の、そして最も基本的な規準、それは、社会的事実をモノとして考えよ、ということである。
- ・ヴェーバー：この意味での社会学、そしてまた歴史学の双方にとって、認識の対象は行為の主観的な意味連関である。

「社会をつくり上げているのは、客観的事実性としてあると同時に主観的意味としてもある」というこの2重の性格であるとした上で、これがいかに可能なのかについて探ることが、社会学理論にとっても中心の問題としています。さらに言い換えると、

①「主観的意味が客観的事実性になるのはいかにして可能なのか」あるいは、

②「人間の行為がモノの世界を作り出すのはいかにして可能なのか」

という問題となります。そしてこれらの問題に応えるためには、つまり、「社会がもつ〈独特の現実性〉を正しく理解するには、この現実が構成される仕方を研究することが必要」である、そしてこれが知識社会学の課題であると定式化するのです。これで、この本のタイトルにたどりつきました。タイトルは、まさしく、この書籍の中核の問題を表現しているわけです。

(令和3年4月23日受理、令和3年7月9日採択)

